

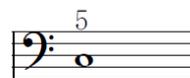
※レッスンで使用する教材の一部です

5 の和音

5 の和音はバスから数えて、3度、5度、8度（または1度）上の音で構成されます。楽譜上では、「3」、「5」、「8」、と書かれているときにこの和音を演奏します。何も書かれていない時も基本的にはこの和音ですが、全く数字が書かれていない作品の場合は奏者自身の知識を総動員して数字を書き、和音を決定しなければなりません。それについての説明はここでは省略します。

実際に和音を弾いてみましょう。

例えば例のように、ドに対して「5」と書かれている場合…



3度上のミ、5度上のソ、8度上のドを弾きます。ド、ミ、ソであれば度の高さの音でも構いません。この後勉強する数字でも、音の種類さえ合っていれば、高さはどこでも構いません。



実施例

違うポジションで書いてみましょう

また、「#」「b」「k」とだけ書かれている場合も5の和音ですが、3度の音に臨時記号が付きます。

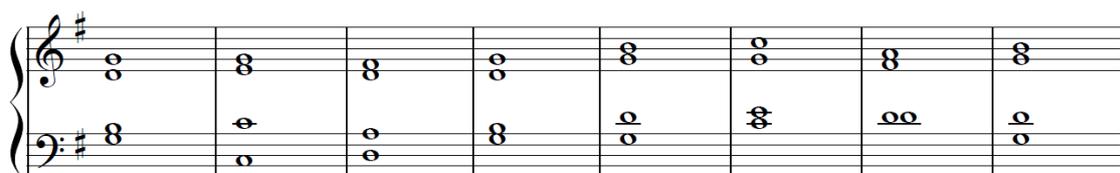
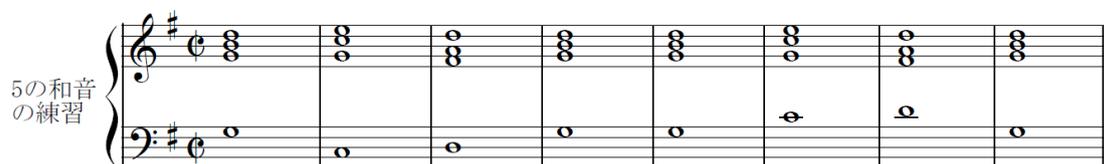
それでは、17世紀のイタリアでよく使われたバツソ・オスティナート Basso Ostinato (伊：執拗な低音) の一種であるベルガマスカ La Bergamasca で練習してみましょう。調号がついている場合、数字付き低音でもその調号は守られます。この場合、レの上に#が書かれていなくても、ファ#を弾きます。

La Bergamasca



ベルガマスカはソードレーソというシンプルなバスですが、和音のつけ方には様々な可能性があります。今回は5の和音だけで練習してみましょう。

【実施例】



平行8度、5度は和声法と同様に原則禁止です。通奏低音の場合、特に17世紀後半からのイタリア音楽や、レチタティーヴォのレアリゼーションで内声での平行は許容されています。しかし、例えば18世紀フランスの作曲家F.クープランは平行を避けることを推奨している他、同時代のドイツの作曲家、G.Ph.テレマンやJ.D.ハイニヒェンの教則本でのレアリゼーションでは様々な方法で避けられています。というわけで、練習の段階での平行は避けましょう。

【禁則：平行8度、平行5度】

